

水稻新品種「ユメヒカリ」について

1) 西山 壽・1) 渡辺進二・1) 本村弘美・2) 井邊時雄・3) 滝田 正・山下 浩・4) 斉藤 薫
 (九州農業試験場・1) 元九州農業試験場・2) 農林水産省農林水産技術会議事務局
 3) 宮崎県総合農業試験場・4) 農林水産省農蚕園芸局)

Hisashi NISHIYAMA, Shinji WATANABE, Hiromi MOTOMURA, Tokio IMBE, Tadashi TAKITA,
 Hiroshi YAMASHITA and Kaoru SAITOH: A New Rice Cultivar "Yumehikari"

水稻新品種「ユメヒカリ」は1990年から、福岡県、佐賀県、長崎県、熊本県、大分県、宮崎県において奨励品種に採用され普及に移された。ここに本品種の育成経過並びに特性概要を報告し、普及の参考に供する。本品種の育成に関し、種々ご高配にあずかった関係機関各位に深く謝意を表する。

1. 来歴及び育成経過

「ユメヒカリ」は、1982年、晩生・強稈かつ良食味品種の育成を目標に、良食味の「コシヒカリ」と晩生で短稈の「ニシヒカリ/コシヒカリのF₂集団の選抜個体」を交配し以後集団育種法・系統育種法により育成した品種である。F₁は1982年度の冬期に養成し、'83年度は温室栽培でF₂~F₃を養成し、'84年F₄で個体選抜を行い、'85年(F₅)より系統育種法によって選抜・固定を行ってきた。1987年(F₇)以降「西海186号」の系統名で、関係機関において地方適応性を検討し、1990年6月水稻農林302号として登録、「ユメヒカリ」と命名された。

第1表 ユメヒカリの特性 (育成地)

項		目	ユメヒカリ	ミナミニシキ
早	晩	性	晩生の晩	晩生の晩
草		型	中間型	穂数型
出	穂	期 (月日)	9.9	9.8
成	熟	期 (月日)	10.24	10.26
稈	長	(cm)	77	75
穂	長	(cm)	19.2	19.3
穂	数	(本/m ²)	335	358
止	葉	葉色	やや淡	中
止	葉	直立性	中	立
芒	の	多少・長短	無	少・やや短
ふ	先	色	黄白	黄白
ふ		色	黄白	黄白
脱	粒	性	やや易	やや易
粒	着	密度	やや密	やや疎
耐	倒	伏性	強	強
葉	い	もち	やや弱	中
(推定遺伝子型)			(+)	(Pi-a)
白	葉	枯病	中	やや弱
穂	い	もち	中	やや強
縞	葉	枯病	罹病性	罹病性
玄	米	重 (Kg/a)	57.8	60.3
玄	米	千粒重 (g)	21.6	22.9
品		質	上下	中中
食		味	上中	中上

注) 1986~'89年度, 標肥試験の成績

第2表 ユメヒカリの食味 (育成地)

品 種 名	総合	外觀	粘り	基準品種	試験日 (年・月・日)	パネル数 (名)
ユメヒカリ	0.58	0.42	0.63	レイホウ	1987.1.20	24
コシヒカリ	0.92	0.54	0.54			
ユメヒカリ	1.09	0.38	1.04	レイホウ	1988.1.18	23
コシヒカリ	0.52	0.25	0.29			
ユメヒカリ	0.53	0.58	0.58	レイホウ	1988.12.23	19
コシヒカリ ¹⁾	0.63	0.05	1.16			
ユメヒカリ	0.64	0.59	0.64	レイホウ	1990.1.11	22

注) 1) 北陸農試 (新潟県上越市) 産 食糧庁の方式に準ずる

2. 特性の概要

1) 形態的特性 「ミナミニシキ」と比較して稈長はやや長く、穂数は少ない中間型の稈種である。葉色はやや淡く、止葉はやや垂れる。着粒密度はやや密、芒はなく、脱粒性はやや易である。

2) 生態的特性 「ミナミニシキ」と比較して、出穂期はやや遅く、成熟期はやや早い、晩生の晩に属する。耐倒伏性は強である。いもち病抵抗性遺伝子型は+と推定され、葉いもち抵抗性はやや弱、穂いもち抵抗性は中である。白葉枯病抵抗性品種群は金南風群に属し、圃場抵抗性は中、縞葉枯病には罹病性である。収量性は「ミナミニシキ」よりやや低い。

3) 品質・食味特性 玄米の外観の品質は上下で「ミナミニシキ」より勝る。食味は粘りがあり、総合評価は「ミナミニシキ」、「レイホウ」より良く、「コシヒカリ」並みの上中である。

3. 奨励品種採用理由

九州地域では、良食味品種として早生種では「コシヒカリ」、「ミネアサヒ」、「クメヒカリ」、「クジュウ」、「農林22号」、中生種では「ヒノヒカリ」等が普及しているが、平坦地で主に作付されている晩生種には、良食味の品種がない。

奨励品種採用各県では、「ユメヒカリ」を晩生種の食味向上を担う品種として位置づけており、今後これらの県における食味の向上が期待される。

4. 栽培上の注意

良質、良食味の特性を発揮させるため以下の注意が必要である。

強稈だからといって多肥栽培とならないよう肥培管理に注意する。

登熟期における水田の過乾燥は食味を低下させる危険性が高いので水管理に注意する。

刈遅れすると茶米の発生などにより品質が低下する恐れがあるので適期刈りに努める。